なんじゃもんじゃの木を見に行きました。

技術士（衛生工学）　本　堀　雷　太

第 10 回生物多様性条約会議（COP10）が開催される名古屋国際会議場の西側（熱田西町）には、なんじゃもんじゃの木が約１km に渡り植えられており、毎年５月上旬には美しい白い花を木いちめんに咲かせます（右写真）。

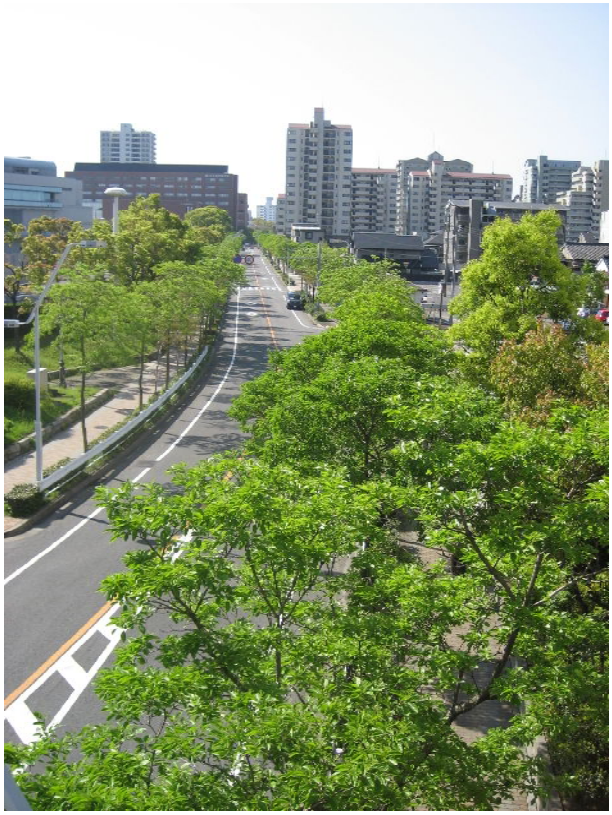
なんじゃもんじゃの木の標準和名は「ヒトツバタゴ」、学名は *Chironanthus retusus*（＝雪の花）と言い、中国や朝鮮半島、台湾、日本などの東アジアに自生するモクセイ科の落葉高木であります。

興味深いことに、我が国においては長崎県の対馬の北端と愛知県犬山市の一部、岐阜県の木曽川、土岐川の流域の一部にのみ自生しています（北限は馬篭辺りです）。また対馬の個体と愛知・岐阜の個体では、葉・花・実の大きさや形が少しづつ異なっており、遺伝的な相違も指摘されています。この奇妙な不連続分布は、氷河期の生き残りであるとか、稲作技術とともに大陸から持ち込まれた先史帰化植物であるとか様々な説が提唱されていますが、未だに明確な根拠はありません。今後、朝鮮半島や大陸の個体との DNA を比較し、系統調査が行われることが期待されます。分布が非常に限られた植物であるため、他の土地に持ち込まれた際に名前が分からず「なんじゃもんじゃ」と呼ばれるようになったそうです。

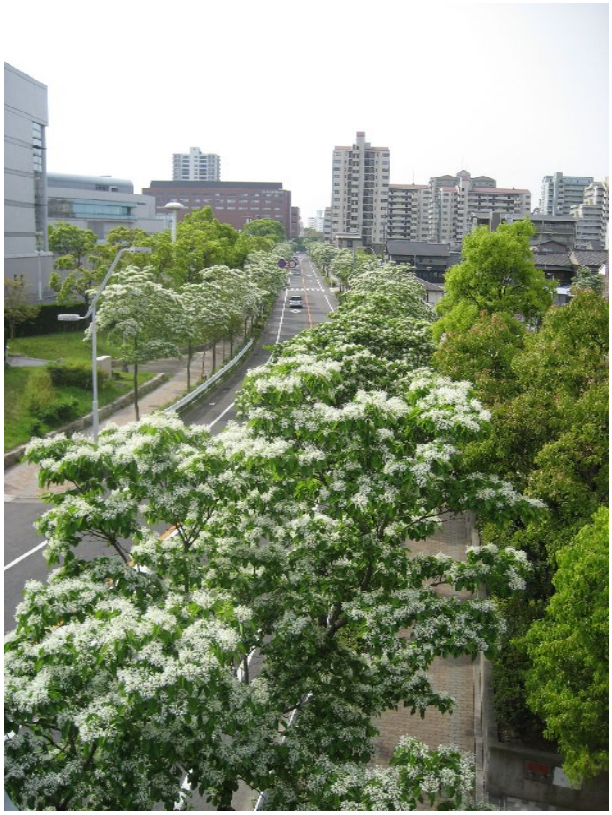
いずれにせよ愛知・岐阜にゆかりのある在来の植物が街路樹として植えられ、雪の様な美しい花を咲かせ、人々の目を楽しませるとは、名古屋市もなかなか粋なことをしますね。

ヒトツバタゴには両性花株と雄株が存在し、おしべ・めしべが揃った両性花のみが秋に実を付けます。

花は左写真のように四裂した萼、白い花びら（四弁のように見えますが実は四裂した合弁花冠）、２本のおしべと、両性花ならばさらに真ん中に１本のめしべが存在します。



開花前（平成 22 年４月 24 日撮影）



開花後（平成 22 年５月４日撮影）

参考文献：太田敬久, 化学と生物, 23, 4, pp.259-263(1985)